

SHONAN TSUSHIN REPORT

木工作家・馬場健二の仕事

木は、人が最も古くから使ってきた素材。太古の昔から人々は森のすぐそばに住み、木によって文化が生まれ、暮らしが成り立っていました。百年、二百年といった単位で遙かなる時を刻む木は、私たちに限りないぬくもりと安堵感、存在感を与えてくれます。そんな木のもつ魅力にひかれ、長い間無垢の材料にこだわり続ける木工作家、馬場健二さん。森の心を今に伝える彼の作品は、便利で快適な生活を求める現代の暮らしに何を問いかけているのでしょうか。

木との一期一会の中で

体育館のような広い倉庫風の仕事場に、シュー、シューッと響き渡る鉋の音。無機質な電動工具や各種の道具類、塗料、木の破片などが混在する中で、まるでそこだけ大きな生き物が横たわっているかのよう

に感じられる、一枚の板があります。何度も何度も一生懸命鉋をかけている、木工作家の馬場健二さん。

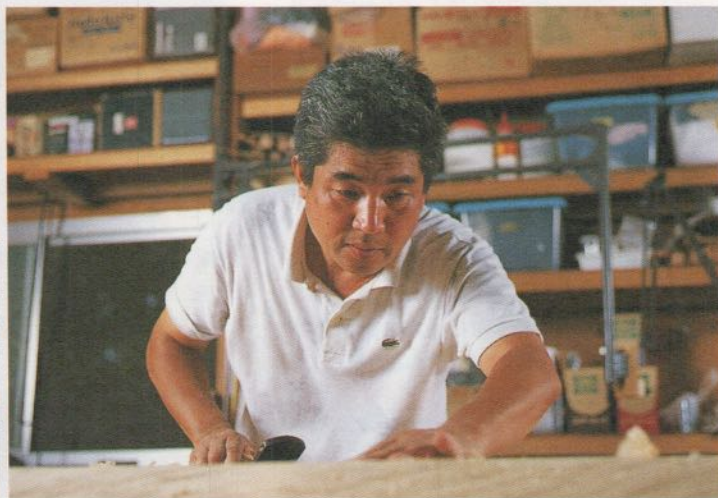
「持続的な握力は強くなりますね。冬でも汗びっしょりになりますよ」。

馬場さんは、長い間無垢の一枚板にこだわりながら作品づくりをしています。

「トチ、セン、サクラ、ケヤキ……納得のいく素材を探しに、日本全国あちこち自分の足で歩き回ります。国産の木は豊かな持ち味がありますね。同じ種類でも産地によって木味が微妙に違うんです。わざわざ遠くに出かけても、いい木にめぐり会えないこともある。人間と同じで一期一会、“出会い”というものがあるんですよ」。

こうしてこつこつと集めた素材を、外積みにし何年もかけて寝かしている馬場さん。コンクリートの土台を地下に埋め込み、水平に保ちながら、遮光率、遮風率を十分に考慮し、木のレベルが狂わないように万全の配慮をしながら乾燥させています。

「これだけの規模で素材を寝かせてい



対話をはぐく

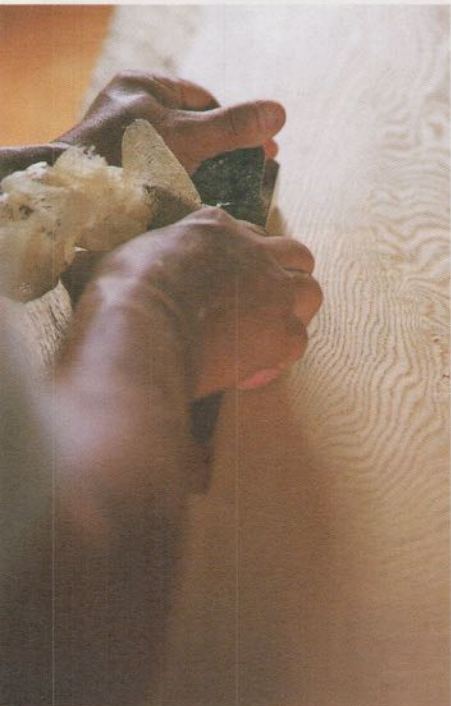
る木工作家はいないよ、と材木屋さんにもよく驚かれます。製材したときはおとなしくても、1年くらいたつと地が出てくる木もあるんです。少なくとも5~6年、長くて10年、じっくり素材とつきあっていきます」。

手仕事の可能性を模索する

大学で専攻したものは油絵。しかし、自分には向いていないのではないかと悩み、考え抜いた末、たどりついたのが木工だったという馬場さん。

「小さい頃、近所に大工さんがいて、よく後をくっついては工作を教えてもらいましたよ。そんな幼い頃の体験もどこかでつながっていたのかもしれない」。

卒業後は江戸指物師のもとに弟子入り



し、伝統工芸を学びました。

「今の時代、伝統工芸の世界で、昔ながらの方法で生きていくのは至難の業。手仕事にこだわるあまり、正当な進化ができない、という側面もあります。自己満足に終わらず、プロとしてどう生きていけるのかはいつも課題で、何を作りたいのか、何を作るべきなのかたえず背中合わせでした」と、これまで歩いてきた道のりを振り返る馬場さん。そうやって試行錯誤を繰り返しながら、ようやくひとつの境地が開けたのが、10年ほど前のこと。



「それが、この三角形の囲炉裏テーブルでした」。

知人から「場の中心になりつつ、そこにいる人がそれぞれにくつろげる大テーブルをつくってほしい」という依頼がきた時、ふとひらめいたのが懐かしい囲炉裏だったのだそうです。

対話をはぐくむテーブル

炭をくべながら、赤々と燃える火を見つめているだけで、どこか癒されていく囲炉裏。ほんの数十年前までは、日本人の生活の中には、生の火を囲む暮らしがありました。いつのまにかそこに家族が集って暖をとり、お腹を満たし、くつろぎの中心となる場所。そんな囲炉裏を、馬場さんは大きな三枚の無垢板を組み合わせた中心にしつらえ、現代の暮らしに合う独自のスタイルのテーブルとして創り出しました。

「四角いテーブルだと人が真正面から向き合い、視線もぶつかり合って緊張した雰囲気になってしまうのです。でも三角だと人は互いに少しだけ斜めに向き合うので、なんとなく場持ちがいい。間が持てるんですね。だから居心地もいい。長いテーブルは話題が分かれますが、三角形なら話題もひとつになります」。

たとえばお父さんはつまみをあぶりながら晩酌。その横ではお母さんが縫い物を。そして子どもたちは本を読んだり、宿題をしたり。家族が思い思いに過ごしながらも、なんとなく一緒にいたいと思える。適度な

SHIN REPORT

むテーブル

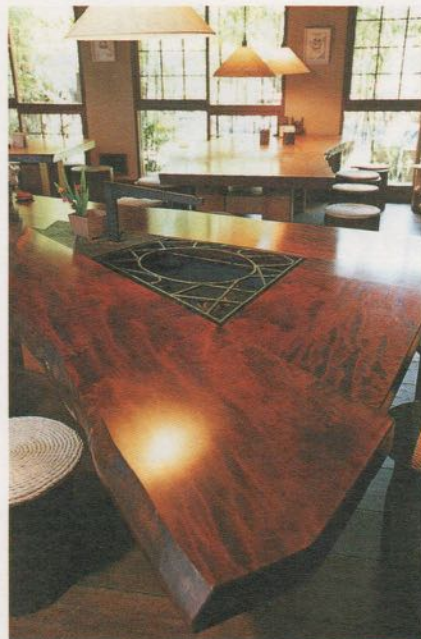
距離感がありつつも、そこはかとない一体感を感じさせてくれる……。火を囲むゆったりとした時間と、人と人との対話を現代に甦らせてくれる不思議な求心力が、このテーブルにはあります。

有機的なもののあたたかさ

「木本来の味わいと素材感のある無垢板は、実に有機的なもの。生きていて呼吸をしているかのように感じられる。だからこそひかれるんです。世の中全体が無機的になっている中で、いのちの通うあたたかさ、やさしさがそこにはあるからでしょう」。

いつのまにか私たちは、生活に手軽さ、便利さ、早さを求めるようになり、たとえばベニヤ板などの均一素材、大量生産による安価な規格品を選ぶようになりました。その結果、すぐゴミになってしまうもの、土に還らない素材が増え、本物の良さを孫子の代まで残すという文化が失われつつあります。住宅の建て替えサイクルが、どんどん短くなっていることも然り。建てては壊すというスクラップ・アンド・ビルドで経済を循環させようとする安易な生き方によって、私たちはいったいどれだけの大切なものを失ってきたのでしょうか。

「時に修理も施しながら大切に使い続ければ100年はもつものに、人々がこれからどれだけ価値を見いだしていけるか、わかりません。でも、そこにあるだけで素材感が伝わって心がほっとするもの。実用もあり、ずっとそばにおいておきたいと思えるもの。



馬場さんのテーブルがたくさん置かれている「九つ井」の店内で。火を使わない季節には、自在かぎをとりはずして、鉄や竹で作ったふたができるデザインにもなっている。

そんなものづくりをこれからも続けていくことが、ささやかでも自分の役割ではないかと思っています」。

悠久の時を刻む永代の森からいのちの付託を受けているかのように、木の想いを現代に問かける人。自然との、そして人と人との対話を創り出していく馬場さんの仕事は、未来を見据えています。

※馬場健二さんの「創作いろり」展が、九つ井の「山の上ギャラリー」(横浜市戸塚区小雀町644-2)にて開催されます。11月30日(土)～12月23日(月) 午前11時～午後5時(祝日をのぞく月・火が定休)。問合せ: ☎045-852-8855 山の上ギャラリー。「木工房ん」世田谷ショールーム ☎03-3702-0009

湘南通信

SHONAN LINKAGE PAPER

暮らし向き湘南流

特集

木工作家

馬場健二の仕事

秋号